

2022年小教区評議会役員交流会報告

- テーマ： サイクルテーマ②「教会共同体づくり」
「シノドス・ともに歩む教会共同体づくり」
- 対象： ブロック担当司祭、協力司祭、宣教司牧協力者、小教区評議会役員
- 講師： 大塚喜直司教 一場 修神父
- 日時： 2022年10月1日（土） 14：00～16：00
- 開催方法： ZOOM ミーティング
- 参加人数： 58名（信徒 49名、修道者 2名、司祭 7名） 29教会 端末数 43
- 内容： 司教講話「シノドスのまとめを受けて」 福音宣教企画室担当司祭メッセージ
信徒の分かち合い ブレイクアウトルームでの分かち合い、

大塚司教講話要旨 「シノドスのまとめを受けて」

①役員研修会のサイクルテーマ

役員研修会・交流会は3年のサイクルで3つのテーマを扱っている。まず「①教会と福音宣教の理解」を深め、そのための「②教会共同体づくり」について考え、共同体づくりができれば「③社会への福音宣教」を考えていく。今年は「②教会共同体づくり」について考えている。

今、ちょうど「シノドス(世界代表司教会議)」の準備がされており、今回のテーマ「ともに歩む教会のため～交わり、参加、宣教～」が表すように、フランシスコ教皇の呼びかけで全員が参加していると言ってよい。「シノドス」とはギリシャ語の「シン(ともに)」と「ホドス(道)」を合わせた造語で「ともに歩む」という意味であり、「ともに歩むこと」、「ともに歩むあり方」を「シノダリティ」という。

②春の研修会会の3名の司祭の講話を振り返る。

奥村豊神父講話 キーワード：『自己開示』神が私たちにご自分を開き、示してくださった。

- ・コロナ禍にあって、自分の何かが開かれ、新しいことに取り組み、関わりがなかった人と関係を作る中で、福音を生きること、伝えることの動機付けとなった。
- ・会えないことで、かえって普段あまり言葉にせず、自分の中に秘めてきた信仰の言葉、思い、感情や、見えなかったもの、隠されていた何かがあらわになって来た。
- ・神がイエス＝キリストによって自己開示されたように、「シノドス」はまさに教会が、信徒同士が、自らを開き、また社会に自らを開いていく動きである。

一場神父のコメント ここでは教会の本質である「集まること」、「コミュニオン(交わり)」、「エクレジア(集められたもの)」が語られている。

小立花神父講話 キーワード：『人が共同体を作る』

- ・「小立花神父の妄想」—2050年の教会—

日本人信徒の減少により、小教区は各府県に1つ～2つ、外国籍信徒は増加し、各国語の共同体は各府県に1つ。悲観するのではなく、遠い先を見て、今何に向かっていくのかを考えてみよう、という提案。

- ・「私の共同体づくりは人」

コロナ禍で必要な事、必要でないことが見えてきた今、新しい共同体づくりのチャンスであり、共同体を作る一人ひとりが大切にされることが求められている。組織、部会は人を動かし、互いに尊敬し、助け合うための道具にすぎない。

一場神父のコメント コロナ禍は転機、チャンスである。危機の時ほど神のこと、人のことを深めていくよう招かれている。

菅原友明神父講話 キーワード：教会の底力

- ・多くの信徒の祈りと様々な奉仕の上にミサが成り立っている。ミサを続けることは当たり前ではなくありがたいことである。コロナ禍で今まで見えなかった教会の底力が発揮された。
- ・野球チームに例えて、教会の歴史の中でも、低迷、衰退期に、聖人をはじめ名もない人々の底力が発揮されてきた。シノドスとは、自信と誇りを持って現在の教会の現実をしっかりと見詰め、底力を発揮していくときである。

一場神父のコメント 教会の動き、それ自体がシノドスである。

③日本のシノドス回答から、日本の教会に共通する課題

日本の課題がほぼ京都教区にも当てはまる。どの教区も以下の現状認識が挙げられる。

司祭・修道者の減少と召命の激減。信徒の減少と高齢化。

子ども、若者がいない。

会議やイベントに疲弊した小教区共同体。

資金不足。内部の不一致。

信徒職員がほとんどいないカトリック施設だが、一方でカトリックでない人々との多くの出会いがある。

一般社会からの認知度の低下。

共通課題として、今回、回答しなかった人たちの声をどう拾い上げるか。

司教団の示した今後に向けての4つの課題

1. 少数派としての日本の宣教という特徴をわきまえていく。アジア、東洋の伝統的精神性を背景に、ますますグローバル化する日本社会の中で開かれた信仰共同体として歩んでいくことは日本の教会の召命でありかたちである。
2. 「ともに歩む」ための霊的識別のためにサポートする人を養成する。
3. 信仰共同体の人と人とのつながりを強めていく。
4. 全国的規模でのシノドスの歩みを続ける。

④シノドスのアンケートから浮かび上がった教会共同体づくりの切り口として

1. 「語る」教会から「聴く」教会へ
2. 「日本人信徒」と「外国籍信徒」の協働
3. 「祝う」ことを実感する典礼・ミサを意識する
4. 「ともに歩む」べき人は周囲、社会で「助けを必要とする人」

一場神父メッセージ要旨

シノドスの歩みを続けて来て思っていることを述べたい。

信条の中に「教会を信じる」という言葉があるが、それは一緒に歩んでいる仲間を信じることだと思う。洗礼を受け、聖霊が働き、神からの賜物をいただいている仲間を信じ、ともに歩んでいる。それが神を信じ、教会を信じることだと思う。日本社会の中で少数派として生き、もがいている、お互いに知らない場所で洗礼を受けたキリスト者としてがんばっている、という事を信じるのが大事なのではないだろうか。お互いを信じる、すなわち教会を信じることが求められている。

シノドスの分かち合いの中で、それぞれがシノドスを捉え、今日のような分かち合いの機会に、今、分かち合っているこの人は、洗礼を受けた神の子で、ともに歩いていく数少ない大切な仲間なのだと信じるのが大切である。

教会には色々な問題があるが、教会とは今生きている現実の教会であり、「理想の教会」というものはない。今の現実の教会に聖なる者が集まっており、そこからスタートしたい。それはお互いに信じあえば簡単なことである。信じあって分かちあいをすれば今日のテーマを活かすことができる。お互いの素晴らしいところ、よいところを見つけ合ってほしい。互いの中に神の働きを見つけることが識別である。難しいことだが、常にそのような訓練をすれば楽しくなるのではないか。シノドスを通じて色々なことを試みてほしい。日々のことで疲れていても、教会に来れば信じあう仲間と会い、時には喧嘩もし、和解してともに歩むことができれば楽しくなると思う。

小教区信徒の分かち合いから

1. シノドスの取り組み

コロナの影響下で分かち合いが難しい中で、質問内容を工夫し、アンケート形式、少人数での分かち合いなどの方法を取り実施した。普段聴けない意見を聴くことができた。

- ・ミサ以外の交流、交わりの大切さを認識した。
- ・キリスト教諸派との交流、協力が課題。
- ・社会生活の中でカトリック信者は少数派であり、取り残されている。
- ・司牧者を「様」付けで呼ぶとともに歩んでいる感じが無い。
- ・洗礼を受けたものだけが「清い」というのは違う。

2. 共同体づくりのヒントと感じられたこと

- ・互いに祈り合い、その方のために、祈る心をもつこと。何かを「する」のではなく、ともに「在る」こと。
- ・一人ひとりが役割を通して教会の一員だと思え、居場所が自覚できること。「皆が嬉しい」奉仕の形。そこには無理ながんばりは無く、それぞれができることをしただけで喜びと感謝が生まれる。そのような奉仕の場を整えるのが役員の仕事ではないか。
- ・対面とオンラインでのハイブリッド会議や集い。
- ・色々な考え方がある日本社会では寄り添っていく課題がたくさんあるが、一緒に悩んで考えることが「ともに歩む」ことになる。

3. 教区のまとめに携わって

印象に残ったこと

- ・理念的な内容より、困難で実現できていない課題が多く、そこに気づきが多くあった。
- ・会えない人、来なくなった人など不在の仲間を意識し、何とかしたいという気持ちの表れ。
- ・教会は人の集まりで、色々な人が関わりあうことが大切であるという思いが表れている。
- ・日本ではクリスチャンが少数派であることの困難がにじみ出ている。
- ・一方でカトリックの幼稚園や福祉施設では日常の活動を通してキリスト教の精神が保護者や利用者におのずと伝わっており、学ぶ点がある。

今後の歩み

- ・会議では正しさを追求する議論でなく、互いの思いをくみ取り、識別することが シノドス (ともに歩むこと)につながる
- ・回答やまとめは過程に過ぎず、分かち合いの継続、思いを聴きとることが大切。教区や日本の司教団のまとめをきっかけにさらに分かち合いを継続する努力が求められる。シノドスを通じてより多くの信徒の参加が求められている。

小グループでの分かち合い 1グループ4～6名(信徒10グループ 司祭司牧者1グループ)

司教講話、一場神父のメッセージ、信徒の分かち合いをもとに、『自分の小教区やブロックの現状から、【シノドス・ともに歩む教会共同体づくり】のために、どんなことができるでしょうか』というテーマで分かち合いを行なった。

大塚司教まとめ

京都教区は定期的な役員研修、交流、共同宣教司牧、評議会、部会などを通して、「ともに歩む」ことを続けてきている。今回のシノドスの回答にも、コロナ禍の中答えてくださり感謝している。春の研修会での体験に基づいたユニークでバラエティに富んだ司祭の考えにも豊かさを感じた。

そのような司祭団と、役員の方々とともに今一緒に歩んでいることに感謝している。皆さんの奉仕は教会のために必ず役に立っており、他の信徒の方々もそれを感謝し、教会共同体を通して神の愛を社会に広めていく、本当の意味での宣教共同体になって行く大きなシノダリティを歩んでいる。共同体を軸に何が出来るか「考える」こと自体がシノダリティである。会議や掃除も教会活動がシノドスであり、どんな形の奉仕も教会は豊かになる。「小ききテレジア」の記念日である今日、教会の奉仕にはいろいろな役割があるが、愛を生き、愛を分かち合うこと、愛を担っていることを伝えておきたい。

福音宣教企画室振り返り

コロナ禍で、シノドスに向けた分かち合い、意見収集の体験をして来た役員の方々が、大塚司教の講話、一場神父のメッセージ、また、同じ役員からの小教区やブロックでの体験、京都教区のまとめに携わった信徒の発表を聴いて分かち合った。

zoom ミーティングも4回目をむかえ、慣れてきた方も多く、画面越しとはいえ情報交換や気づきの場となり、移動のための空間的、時間的節約と共に便利な方法である一方、環境が整わないため参加できない方もおられることに対する対応も必要であると感じている。

2022年11月 福音宣教企画室作成